



2023年 第39回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第39回 写真の町東川賞受賞作家

<海外作家賞> 対象国：ペルー

アストリッド・ヤーンセン氏 (Astrid JAHNSEN)

受賞理由：『On Your Knees』(2017年)、『Backdrop』(2018年)、『The Lost Gaze』(2019年～)など、一連の作品に対して

<国内作家賞>

はら み き こ
原 美樹子氏 (HARA Mikiko)

受賞理由：写真集『Small Myths』(Chose Commune、2022年)に対して

<新人作家賞>

ふじおか あ や
藤岡 亜弥氏 (FUJIOKA Aya)

受賞理由：展覧会「New Stories ニュー・ストーリーズ」(奈良市写真美術館、2022年)、「ぎこちない会話への対応策—第三波フェミニズムの視点で」(金沢21世紀美術館、2021年)ほか、近年の多様な活動に対して

<特別作家賞>

いしかわ なおき
石川 直樹氏 (ISHIKAWA Naoki)

受賞理由：写真集『SAKHALIN』(アマナ、2015年)、『知床半島』(北海道新聞社、2017年)、2016年から展開されている「写真ゼロ番地」の一連のプロジェクトに対して

<飛弾野数右衛門賞>

ひろた なおたか
広田 尚敬氏 (HIROTA Naotaka)

受賞理由：長年にわたって地域の人・自然・文化と密接に関連している鉄道を撮り続けている活動に対して

第39回 写真の町東川賞審査会委員 (敬称略/五十音順)

安	珠	(あんじゅ)	写真家
上野	修	(うえの おさむ)	写真評論家
神山	亮子	(かみやま りょうこ)	学芸員、戦後日本美術史研究
北野	謙	(きたの けん)	写真家
倉石	信乃	(くらいし しの)	詩人、写真批評
柴崎	友香	(しばさき ともか)	小説家
丹羽	晴美	(にわ はるみ)	学芸員、写真論
原	耕一	(はら こういち)	デザイナー

第39回 写真の町東川賞審査講評

第39回写真の町東川賞審査会は、2023年2月22日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞51名、新人作家賞59名、特別作家賞23名、飛弾野数右衛門賞45名、海外作家賞12名。例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧し、午後から合計171名の作家より5つの賞を選ぶ審査に入った。今年も審査委員8名のうち2名が欠席し、欠席者が事前に推挙した候補者を審査に反映させつつ進行していった。

国内作家賞は、最終段階で5名に絞り込まれ、議論と投票を繰り返した結果、僅差で原美樹子氏に決定した。スナップショットに身体を委ね、瞬間を育んでいく原氏の表現は、いっけん静かでオーソドックスなものにも見えるが、議論しつつ写真集『Small Myths』を繰り返し閲覧するなかで、徐々に作品の力が満ち溢れていったように感じられた。原氏は、寡作ながら毎年の審査で注目されてきた写真家でもある。ゆっくりと波紋のように広がり続ける作品の力が、今回の受賞に結実したと考えることもできるだろう。

新人作家賞は、赤鹿麻耶、石川竜一、田川基成、中井菜央、西野壮平、藤岡亜弥の各氏が残り、最終段階で石川竜一と藤岡亜弥、両氏の一騎打ちとなった。投票を繰り返し、議論を重ねたが、票がきれいに割れたままの状態となり、休憩を挟み、再度審査を進めた結果、藤岡亜弥氏が選ばれた。美術館・ギャラリーでの個展・企画展や出版はもちろん、時にソーシャルメディアなども活用しつつ、実直に自作を問い返しつつ思考を深めていく藤岡氏のしなやかなスタンスが、議論の過程でより鮮明に浮かび上がり、決め手となったといえよう。

特別作家賞に選ばれたのは、写真集『SAKHALIN』や『知床半島』などで北の地をテーマとした作品を発表すると同時に、「写真ゼロ番地 知床」のプロジェクトに関わり、写真展、ワークショップ、トークショーなどの活動を継続している石川直樹氏である。石川氏は、第25回写真の町東川賞・新人作家賞の受賞者でもあり、周知のように、類例のないフットワークで世界中のあらゆる場所から日常までを撮り続けている写真家である。今回の選出は、移動し続けることと地に足をつけた活動の稀有な両立を照らし出すものでもあるだろう。

飛弾野数右衛門賞には、現代鉄道写真のパイオニアであり、鉄道の魅力を多角的に表現し続けてきた広田尚敬氏に決定した。日本における鉄道は、地域という概念と切り離せない深い関連がある。飛弾野数右衛門賞の規定には「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者」とある。広田氏が体現してきた鉄道写真の厚みと広がり、賞の規定を重ねてみると、違和感なくぴったりと合致するではないか。2010年に新設された飛弾野数右衛門賞に、また新たなページが刻まれたことを喜ぶたい。

海外作家賞は、菅沼比呂志氏の調査に基づいた丁寧な説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のペルーから、アストリッド・ヤーンセン氏が選ばれた。百科事典、新聞、雑誌、アルバムなどを丹念に見返し、ジェンダーに偏ったイメージの用法を再認識するために撮影するヤーンセン氏の手法は、きわめて今日的な問いを提起している。様々な言説の背後にあるイデオロギーを露わにし、記憶を批評へと変容させていく一連の作品が高く評価された。

コロナ禍でのマスクをつけての審査も、今年で3年目となった。とはいえ、3月中旬にはマスク着用が個人判断となり、ゴールデンウィーク明けの5月上旬には新型コロナウイルスの感染症法上位置づけが5類へ移行することが決定している。夏に開催される東川町国際写真フェスティバルでは、感染症対策が大幅に緩和され、以前のようなイベントが実現されることだろう。文化的な活動は不要不急ではないという東川町の信念によって、コロナ禍においても東川賞と東川町国際写真フェスティバルがしっかりと継続されたからこそ、今年の夏があることを忘れてはなるまい。その背景にある、東川町の人々の日常における多大な努力と共感に、改めて深く感謝したい。

写真の町東川賞審査会委員 上野 修



第39回写真の町東川賞 <海外作家賞> 対象国:ペルー

アストリッド・ヤーンセン (Astrid JAHNSEN)

スペイン・マドリード在住

1972年、ペルー・リマ生まれ。リマ大学コミュニケーション学部を卒業後、コピーライターとして、広告業界で働いた後、写真作品の制作を始める。情報を伝えるメディアとしての写真が、歴史を変えられるかということに興味をもち制作している。リマ、サンフランシスコ、マドリードを行き来しながら活動している。

曾祖父が、鉄道建設のためにペルーに来たイギリス人技師で、アマチュア写真家だった。彼の撮った写真を複製しているうちに、彼の見方を盗んでいるような気持ちになり、写真を使った作品の可能性を見出す。同じ頃、'60年代に制作されたポルノ本の撮影も始め、写真を再撮影することによって、物語が変化することに気づき、男性目線で撮られたポルノ写真のイメージを再構築した作品「ひざまづけ」を'17年に発表。

'18年、祖母から譲り受けた百科事典を見て、子供の頃、本の中に女性の姿が少ないことに衝撃を受けたことを思い出す。それから、撮影者の意図なしに、本の中に背景として登場する偶然通りかかった女性たちを再撮影し、主役として再配置する「背景」を発表。

'19年からスタートした「失われた視線」でも、祖母の蔵書の美術書を使用。西洋美術史の中に描かれてきた女性像を女性の元に取り戻そうと試み、そこで描かれてきた女性を男性の視線から遠ざける必要性を提示した。

主な個展に、「ひざまづけ」(Pinakothek Der Modern, ミュンヘン、'22年)、「継承」(ルイス・ミロ・ケサダ・ガーランド・ギャラリー、'19年)、主なグループ展に、「REFRAMED」(フロリダ写真美術館、'21年)、「OSMOSCOSMOS」(国立写真センター、ジュネーブ、'19年)、「'19 サンタフェ・センター賞受賞作家展」(ピクチャー・ギャラリー、インディアナ、'19年)、「'19 Plat(T)Form,」(ヴィンタートゥール写真美術館、'19年)、主な受賞に、ブタベスト国際写真祭'19・ファインアートブロンズ賞(ハンガリー)、「'19 サンタフェ・センター賞・3位(米国)」、ルーセス賞'19年ベスト写真展(ペルー)がある。

<作家の言葉>

私は、写真が教えてくれることを共有する仕事をしています。立ち止まって空間と時間を見つめることは、イメージの中の一瞬を確認するもの以上であり、意識のテストでもあります。それぞれの写真には、私たちが立ち止まって自分自身を見ることを可能にする個々の視線という点で、魔法がかかっています。この創造的なプロセスは、個人的でありながら、同時に理解しやすく、私たちが違いを超えてコミュニケーションをとることを可能にしてくれます。それぞれの写真、それぞれの個人的な視点は、普遍的な真実、つまり私たち全員が同じ言語を話すことができる真実に貢献するものです。

空間や時間の複雑さは、イメージを超えたところにあり、写真に隠されているものを発見するのは困難です。他者への視点を理解することで、視野が広がり、発言力が増すと思うのですが、時に孤独に陥ることがあります。それは、宇宙船に乗っていて、誰とも共有せずに何かを発見するようなものだと思います。

今回の受賞は、感動している向こう側の声を聞くようなものです。それは、私とは非常に異なる宇宙から、非常に洗練され価値のある文化から発せられた声であり、より特別なものを感じられます。

このような重要な評価をいただき、また、私の作品に耳を傾け、祝福していただき、ありがとうございます。今年、東川賞海外作家賞を受賞し、この賞の歴史の一部になれたことは、私にとって大きな名誉です。

アストリッド・ヤーンセン



On Your Knees, 10
2017/2022



On Your Knees, 4
2017/2022



Diamantes del Arte 1967, Book 37,
Caravaggio / Judith ,
Image 21
from the series "The Lost Gaze" 2019



Diamantes del Arte 1967, Book 29,
Gainsborough / Mrs. Baillie
image 67
from the series "The Lost Gaze" 2019



Britannica Encyclopedia 1956,
Volume 11, Hong Kong Plate II
from the series "Backdrop" 2018



Britannica Encyclopedia 1956,
Volume 23, West Indies, Plate I
from the series "Backdrop" 2018



第39回写真の町東川賞 <国内作家賞>

原 美樹子 (HARA Mikiko)

神奈川県在住

1967年富山県生まれ。'90年慶應義塾大学文学部卒業、'96年東京総合写真専門学校研究科卒業。専門学校時代の課題のストリートスナップをきっかけに、しばしばノーファインダーというカメラのファインダーを覗かずに撮影する方法を用いながら、現在まで一貫して独自のスタイルで日常を切り取り続けている。

自身が偶然そこに居合わせた目の前の光景を「なるべく変質させることなくそのままとらえようとした」だけで、「多くのことはカメラに委ねています」と、'30年代のドイツ製フィルムカメラ「イコンタ」を胸からぶら下げ、三人の子供の子育てをしながら、日々の生活の中で出会ったありふれた光景——人、風景、モノを撮影している。写真家としてというより、日常に根ざした生活者の視点が強く見受けられるが、その写真のいずれもがつかみどころのない、言葉では説明しがたいものばかりである。「誰かが“写真は問いを生む”と言っていたのを覚えています、そういう禅問答をやっているような感覚がずっとあって」と語り、当たり前前の日常の尊さ、慈しみさえ感じられる独特なスナップショットである。

'96年に初個展「Is As It」(ギャラリー・ル・デコ、東京)を開催。同年、第13回キヤノン写真新世紀展佳作、第8回写真「ひとつぼ展」に入選する。また、'07年の個展「Blind Letter」Cohen Amador Gallery (ニューヨーク)以降、海外でも注目を集め、'14年には長野重一、森山大道、瀬戸正人との四人展「In Focus: Tokyo」(ゲティ美術館、ロサンゼルス)に出品した。海外で個展、グループ展に参加する一方、国内では'19年のグループ展「対話のあとさき」(横浜市民ギャラリー)で多くの最近作を発表。写真集に『Hysteric Thirteen: Hara Mikiko』(ヒステリックグラマー、'05年)、『These are Days』(オシリス、'14年)などがあり、'17年には『Change』で第42回木村伊兵衛写真賞を受賞。そして、昨年、'96年から2021年までの作品で構成された写真集『Small Myths』が、フランスのChose Commune から出版された。

<作家の言葉>

この度は、東川賞国内作家賞という身に余る賞を頂き、光栄に思うと同時に背筋が伸びる思いです。心より御礼申し上げます。

受賞対象となった『Small Myths』は、初期から2000年代までの作品を中心に構成されており、自身の写真を振り返る契機にもなった写真集でした。

これまで、カメラでささやかに世界と向き合い、気付くと、生きていることと写真を撮ることがどこか分ちがなくなっていました。私自身の思考は拙いにもかかわらず、カメラはそれでも像を結び、そうした像の連なりから、写真を観てくださった方々が、その方自身の来し方、経験、記憶に呼応した何か、確かめられはしないけど、確かにそこにあるような何かを感じ取ってくださったことが、結果、写真家としての私を成り立たせてくれています。

私の日々をこれまで支えてくださった皆様に心からの敬意を。そして、私と共に在ってくれた家族に感謝を。

原美樹子



Untitled, 2006



Untitled, 2007



Untitled, 2008



Untitled, 2018



Untitled, 2006



Untitled, 1997



第39回写真の町東川賞 <新人作家賞>

藤岡 亜弥 (FUJIOKA Aya)

広島県在住

1972年広島県生まれ。'94年日本大学芸術学部写真学科卒業。

大学卒業後に滞在した台湾での出会いからヨーロッパを旅することになる。2週間の予定が、エストニアからフィンランド、イギリス、フランス、スロバキア、ハンガリーと1年半彷徨う。旅先で出会った人々やそこでの経験を写真にした「さよならを教えて」は、'04年ビジュアルアーツフォトアワードを受賞し、同名の写真集がビジュアルアーツ出版から出される。

帰国し、安定した生活が続くと次第に焦燥感を感じ始め、'07年新進芸術家海外研修制度(文化庁)の研修員としてニューヨークに向かう。研修期間終了後も'12年まで滞在し、そこでの出来事や出会った子どもたちをスナップした作品「Life Studies」、「Home Alone」(Dexon gallery、NY、'10年)を発表。

その前後、帰国した地元広島の実家での日常や、家族との距離感を撮った写真集『私は眠らない』(赤々舎、'09年)を出版する。さらに、広島に暮らすようになると「いやがおうでもヒロシマの表象に出会う」。そこから「日常を通して歴史を意識化」しようとヒロシマと向かい合い、それらは「川はゆく」(ニコンサロン、東京、大阪、'16年)に繋がり、第41回伊奈信男賞を受賞。同名の写真集『川はゆく』(赤々舎、'17年)は、'18年第27回林忠彦賞と第43回木村伊兵衛写真賞をダブル受賞。

主な個展に「さよならを教えて」(ビジュアルアーツギャラリー、東京、大阪他、'05年)、「私は眠らない」(AKAAGA Gallery、東京、'09年)、「Life Studies 2」(Place M、東京、'14年)、「アヤ子形而上学的研究」(ガーデンガーデン、東京、'17年)、「アヤ子江古田気分」(OGUMAGU、東京、'22年)、「New Stories」入江泰吉記念奈良市写真美術館(奈良、'22年)、主なグループ展に「DOMANI 明日2020」(国立新美術館、'20年)、「日常の光—写し出された広島—」(広島県立美術館、'20年)、「日常とつながる美術の扉」(東広島美術館、'20年)、「ごちない会話への対応策—第三波フェミニズムの視点で」(金沢21世紀美術館、'21年)等がある。

<作家の言葉>

プラプラするのが好きで、何かを決定していくのが苦手で、撮った写真をもったいぶって見ずに置いておく癖があります。コロナ禍のここ数年は、放っておいたそれらを今こそ精算しようと、古いネガと格闘しました。そして写真に映るあの頃の自分の無意識を探ることに夢中になりました。

子供や花など、なぜか気になってずっと撮っているものがいくつかあります。そんな自分でもよくわからない執着を集めてみることで、どうして自分が写真を撮るのか、自分は何なのか、不意に分かるかもしれない。そんな思いの中で生まれた「NewStories」や「花のゆくえ」、「城の物語」は、これまで自分が組み立てた物語を解体して、新しい軸で編み直してみる試みでした。

古いネガを見ながら過去を散歩していると、自分がずっと学生の気分のまま写真を撮ってきってしまったんだと気づき、ため息をついておりました。そんなところに、思いもよらず東川賞新人賞の知らせをいただき、背筋が伸びる思いでした。私の写真はいつも振り返ってばかりで、生産性を疑いますが、見てくれる人がいることで次に進めます。なんととっても、賞をいただいてあの夏の東川に行けると思うと本当にうれしいです。ありがとうございました。

藤岡亜弥



Life Studies
2013



かわいいだけじゃだめかしら
my life as a dog
1993



川はゆく
Here Goes River
2016



城の物語
The castle
2014



私は眠らない
I don't sleep
2007



私は眠らない
I don't sleep
2009



第39回写真の町東川賞 <特別作家賞>

石川 直樹 (ISHIKAWA Naoki)

東京都在住

1977年東京都生まれ。'00年北極から南極までを人力で踏破し、'01年七大陸最高峰の登頂に当時最年少で成功する。'02年早稲田大学第二文学部卒業、'08年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化人類学、民俗学などの領域にも関心を持ち、世界最高峰の峰々や辺境から都市に至るまであらゆるフィールドを対象に、写真作品を制作、発表している。

'08年、世界各地に残る先史時代の壁画を旅した写真集『NEW DIMENSION』(赤々舎)、北極圏の大自然とそこに暮らす人々に迫った『POLAR』(リトルモア)で日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞を受賞。眺める山ではなく登る山として富士山を捉えた『Mt. Fuji』(リトルモア)の出版をはじめとする積極的な活動が評価され、'09年東川賞・新人作家賞を受賞。'11年南太平洋の島々の歴史と人々の営みを考察した『CORONA』(青土社)で土門拳賞を受賞。その後、8,000メートル峰に焦点を当てたヒマラヤシリーズ『Lhotse』『Makalu』(SLANT)など数多くの写真集を発表し、'20年には『EVEREST』(CCCメディアハウス)、『まれびと』(小学館)により日本写真協会賞作家賞を受賞。また、不屈の冒険家神田道夫の軌跡を追った著書『最後の冒険家』(集英社)では、開高健ノンフィクション賞を受賞する。

主な個展に「JAPONÉSIA」(ジャパンハウス サンパウロ、オスカーニーマイヤー美術館、ブラジル、'20-'21)、「この星の光の地図を写す」(水戸芸術館、新潟市美術館、市原湖畔美術館、高知県立美術館、北九州市立美術館、東京オペラシティアートギャラリー、'16-'19)、「K2」(CHANEL NEXUS HALL、東京、'15)、「ARCHIPELAGO」(沖縄県立美術館、'2010)等がある。作品は、東京都現代美術館、東京都写真美術館、横浜美術館、沖縄県立美術館等に収蔵されている。

また、'16年より道東の知床半島の魅力を、写真を通して発見・発信するプロジェクト「写真ゼロ番地 知床」に関わり、写真展、ワークショップ、トークショー等の活動を積極的に展開している。

<作家の言葉>

十代の頃から三十年近く旅を続けてきました。自分の身体によって世界を知覚し、咀嚼していくことを繰り返していくなかで、いつからか、経験を誰かと分かち合うことも大切な活動の一部となっていきました。

日本列島上に、かけがえのない仲間や拠点となる地域が少しずつ増えていく中で、知床半島はぼくにとって原点のような場所です。写真を通じて地道に何年も活動してきたことが少しずつ広がり、こうして東川でも認知されるようになったことを大変嬉しく思います。どうもありがとうございました。

石川直樹



2020



2017



2017



2017



2017



2017

作品はすべて「知床半島」より
from the series "Shiretoko Peninsula"



第39回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

広田 尚敬 (HIROTA Naotaka)

神奈川県在住

1935年東京都生まれ。中央大学経済学部卒業。

幼少時より鉄道に興味を持ち、中学3年の時に初めて鉄道写真を撮影。以後、鉄道写真にのめり込み、業界の第一人者となり、'88年には日本鉄道写真作家協会を設立。初代会長をつとめるなど、日本の鉄道写真界を牽引してきた。

中央大学卒業後、会社員を経て、'60年フリーの写真家となる。'68年に初個展「蒸気機関車たち」ではオリジナリティ溢れる表現で、新たな鉄道写真の世界を示し、話題となる。同年、初の鉄道写真集『魅惑の鉄道』(ジャパンタイムズ、'69年)をまとめ、英語版も出版。

その後の著作は、初の海外の鉄道写真集である『ヨーロッパのSL』(朝日新聞社、'73年)、全てモノクロ写真で構成された『SL夢幻』(蝸牛社、'75年)など200冊以上にのぼる。また、20代から、それまで絵で描かれてきた子ども向けの乗り物絵本を、写真で構成する写真絵本に仕立て、制作出版を重ねている。

'99年より『レイル・マガジン』増刊としてイヤーブック『鉄道写真』を編集し、自らの作品を発表する一方、業界の先人たちの仕事を紹介するなど、アマチュア写真家たちへ鉄道写真の啓蒙活動を積極的に展開してきた。

'09年には、'60年代にニコンFで撮影した写真をまとめた写真集『Fの時代』(小学館)を出版し、同名の写真展を'18年にニコンミュージアム、'19年に東川町文化ギャラリーで開催し、好評を博す。

最近では、電子書籍を自身で編集、デザインし、発表している。

ブレ、ボケやデフォーメ、自作のカメラを使った独自の撮影方法を手掛けるなど、鉄道写真の表現の幅を広げるとともに、車両のみならず、周辺の風景や人々と鉄道との関わりを捉えるなど、鉄道写真の新機軸を打ち立ててきた。

<作家の言葉>

お選びいただき、びっくりしながらお礼申し上げます。

好きな電車を撮影してきただけなのに、注目していただき恐縮しています。

もともとレールファンというのは、日陰者でした。「大の大人が電車ごっこかよ〜、どこかおかしいんじゃないの」というのがあのころの常識で、何撮ってるのと聞かれると、「えっとー、風景とか…」などと汗をかきながら答えるのがやっとでした。

意を決したのは今から56年前の暮、写真を10枚ほど、富士フォトサロンに持ち込みました。すると、「来年4月に開きましょう」即決です。嬉しかったですね、でも心配事が持ち上がりました。それまでプリントはせいぜいカビネ止まり。大伸ばしは、まるで経験ありません。はたして展示会場で耐えられるかということでした。

杞憂でした。Serenar、Nikkorの写真は見事会場で見得を切り、サロン始まって以来の集客を獲得しました。

希望が持てました。しかし前途は棘道。砂漠を掻き分けかき分けのラッセル車でした。それだけに今回の賞は、人生のオアシスです。

ありがとうございます。

広田尚敬



動輪はスニーカーだ。軽やか。

C55は無限で夢幻の希望を持っている。

Driving wheels are sneakers. Light. C55 has never-ending, dreamlike hope.

1970



旭川から名寄に向かうC55形機関車の火室の炎。

昭和48年、老いても現役。

若者に負けない燃えたぎる魂を持っていた。

Flames of C55 steam locomotive fire chamber bound for Nayoro from Asahikawa. Still at work in its old age, Showa 48 (1973). A burning soul not giving in to the youth.

1973



湘南の水平線の朝陽。

実は新幹線700系ボディの反射。

写真はイメージだ。

Sunrise on the horizon at Shonan. In reality, it's a reflection of the 700 series bullet train. Pictures leave an impression.

2022



ユングフラウ登山鉄道(スイス)で

見かけた足跡(鉄製枕木)。

夜はどんな野生動物が徘徊するのか。

Footprints found on the iron Jungfrau train tracks (Switzerland). I wonder what wild animals roam at night...

2010



振られたくらいで落ちこむな、

胸を張り希望を持って歩け、人生これからだ。

Don't despair just because you are dumped. Stride proudly with hope.

Life has just started.

2022



愛の中に。令和初日(元年5月1日)の

新幹線東京駅スナップ。

Holding with love. Snapshot from Tokyo station's bullet train taken on the first day of Reiwa. (2019, May 1st)

2019

第39回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業2023～

<受賞作家作品展>

会期：7月29日（土）～8月28日（月） 会期中無休

時間：10：00～17：00（7月29日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：100円（7月29日、30日は無料開放）

海外作家賞……………アストリッド・ヤーンセン

国内作家賞……………原美樹子

新人作家賞……………藤岡亜弥

特別作家賞……………石川直樹

飛弾野数右衛門賞………広田尚敬

●7月29日（土）

13：30～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

17：00～18：30 レセプション「受賞を祝う集い」

●7月30日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査会委員、ゲスト

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、事業が変更・中止・延期となる可能性があります。

■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川町は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」（通称：写真甲子園）では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞〈海外作家賞〉	1名	賞金100万円
写真の町東川賞〈国内作家賞〉	1名	賞金100万円
写真の町東川賞〈新人作家賞〉	1名	賞金50万円
写真の町東川賞〈特別作家賞〉	1名	賞金50万円
写真の町東川賞〈飛弾野数右衛門賞〉	1名	賞金50万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する〔写真の町東川賞審査会〕において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、〔写真の町・東川町文化ギャラリー〕に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的的發展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。





フォトフェスタHP

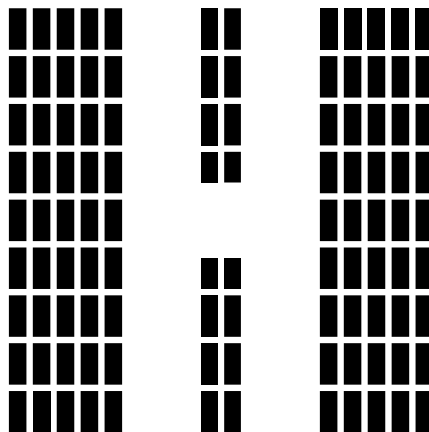
東川町 HP <https://higashikawa-town.jp/>

フォトフェスタ HP <https://photo-town.jp/>

 https://twitter.com/Higashikawa_PF

 <https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/>

 https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

写真文化首都 北海道「写真の町」東川町

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー内
東川町役場 写真の町課（担当：竹田・吉里）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp

<https://photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家作品展出品作に限りません。